12

被爆体験記

ピカに灼かれて

黒い雨の町の証言

第２集

広島医療生活協同組合

す。この惨事を経験せしわれわれ日本国民にして、始めて訴えらるることで、核実験する国に対してはどこまでも抗議、其の否を覚らせ、中止全廃さすべく、どこまでも努力せねばならないことと思うのです。

黒い雨で鯉が死んだ

広島市安古市町字相田
高原　コユキ
六三歳

昭和二〇年八月六日朝八時頃、原爆が落ちた時、私達は畑に行って居りました。B29の飛行機の音がすると思っていましたら、ピカーと光って手足があついと思ったら、ドンーと音がしました。すると武田山の向うから黒煙がもくもくと上がってまいりました。

これは大変だと思って、家に帰りました所、家の中の建具は吹き飛ばされ、ガラスはこわれ、壁は曲っており大変でした。

それから三〇分後に、大夕立のように黒い雨が降って参りました。それで池の鯉も全部死んでしまいました。主人は田の草を取って居りましたけど、町はどんなことやらと言って、武田山に登りましたところ、広島の町は黒煙りでおおわれていたそうです。

それから午後になりまして、被災者達がぞろぞろやって来ました。ほんとに気の毒な人ばかりで、毎日何人も死んで行かれました。

黒い雨で池の魚が浮かぶ

さがしあてた時はもう死んでおりました

広島市安古市町相田二七六
樋口　ミサヲ
八〇歳

今年の正月から風邪が元で色々の病気が出てずっととこについて居りましたが、今月のはじめから少しずつよくなり、今はようよう起きてあるくようになりました。早く書かなければと思っても、仲々きおくをたぐりて見てもまとまりません。私も年ですからどわすれして居りますが、おもなとこだけを申します。ちょうど二〇年の八月六日の朝、次男直之のおともだちがさそいに来られて、広島崇徳中学の一年生でありました。よろこんで毎日行きて居りました。いつものように後を見おくった事もないのに、その日は見えんようになるまで見おくりました。それからしばらくすると、大きなおとがどーとして、同じに光りがピカーとして、内のガラスしょうじがたおれ、同じに棚の物など、どたんと落ち、ざしきにしいてありたゴザが天上へふき上げられました。そうする内に雨がザーザーとふり来て見れば、それがくろいタドンをといたような雨でした。いつも三時ごろにはかえってくる直之がかえりて来ません。何か広島の方で大事がおこりたのではないかと心配しました。夕方になってもかえりて来ないので、私の兄弟やむすこたちがさがしに行きました。其の方へ気を取られて居ったら、内では一年生の三木夫と、幼稚園の清とがびしょぬれになりかえりてきました。見れば白いらんにんぐのしゃつがまっくろになりて、小さい方は泣くばかりです。兄の方に聞いて見たら、国民学校の下の方でサカナをおいまわしていたと言って大きなさかなを四、五ひきもってかえっていました。これが死んでながれて来たのよと言いましたので、すぐすてさせました。其の後たずねに行った者たちがかえりて来ました。もう日はくれるし、同じような小供ばかりじゃから、あした早く行ってさがさねばわからんとのこと故、その日休んであくる日、私も娘も早くからさがしに行きました。その夜の八時ごろ、ある人の知らせで居るところはわかりましたが、もう死んで居りました。すぐつれてかえってそうしきをしましたが、その夜から小さい二人が熱を出して吐き下痢をし、それからつぎつぎと七人がまくらをならべてねとんでしまいました。あたまのかみの毛は皆ぬけて、ねつは下らず、ずいぶんなんぎしました。

われわれは裏側にこのことを考え、行なってきたわけですが、

陳述書

（昭和二〇年八月六日を中心に）

1. 当時の状況（家族とか、仕事のことなど）
2. 昭和二〇年八月六日原子爆弾がおちたとき、どこで何をしていましたか。その時の状況も。
3. 〃黒い雨〃のふったときの状況、まわりの様子、変化など。
4. 被爆者をわり当であずかり看病された方は、そのことをくわしく思いだして下さい。
5. 身体の調子はどうでしたか。小さなことでもくわしく。
6. その後から現在までの体の調子について

氏名	若宮千代子	生年月日	大正10年1月24日生
現住所	安古市町（相田）八二 TEL 8－8501	当時の職業	商業

1. 義母、千代子、雪枝、姪が住んでいた。そして農業とか商業をしていた。姪は小学四年生で、雪枝は家で義母と家にいた。
2. 役場の命令で常会一同が上安の山崎の山へパルプを出しに行った所、八時一五分にぱく風が来て大きな音がして広島は五色雲になって、私は山におれていたら、近所の人が早く帰省しなさいと言われたので、すぐ一同が家に向かった。
3. 姪を小学校からつれて帰る途中黒い雨にあった。川の水もまっ黒くなり魚も浮いてものすごい状態だった。又道路もまっ黒になり、歩いていた人もまっ黒い雨にぬれていた。
4. 家には七、八人の被爆者が割当てられ、焼けた人とか、目のとび出た人とか、妊娠した人などが一週間おきに入れ替りたち替りされ、その人達と一緒に生活をして、けがをした人たちには家にある「赤ちん」などをつけてあげた。
5. 頭痛したり、下痢をしたり、少しきずがうんだりした。当分続いた。
6. 心ぞう、神経痛、りゅうまち、目が疲れやすい、手がしびれる、以上の様な状態なので年二回ぐらい健康診断を受けるようにしてもらいたいと思います。

氏名	畑松江	生年月日	大正7年1月17日生
現住所	広島市安古市町上安六〇三 TEL8—8633	当時の職業	主婦

1. 二人の幼児を抱え家の中にいました。八時過ぎ鋭い爆音で目の前に爆弾投下と直感、二人の幼児を抱えて竹藪の中へひなんしようと思い、行く途中、黒い雨が降りました。主人は鉄道局に勤務しており、あの当時宇品に鉄道局があり、宇品線の電車の中で被爆しており、夜一〇時頃市内を歩いて帰宅しました。

2. 武田山の上を見ましたら、綿を血で染めたような煙が雲まで立ち上っておりました。ガラス窓は破れ、天井は下り電燈は落ちあの時の状況はハッキリ覚えております。未だに二、三年前のことのように思えてなりません。

3. 前の庭が墨汁を溶かして流したような状態でした。勿論野菜にも黒雨がかかっておりましたのを食べ続けました。生後一、五ヵ月の次女が高熱で下痢し、脳まく炎になり正田医師からもう駄目と診断され、生きても精薄児と申され瀕死の看護の結果、奇蹟というか、神仏の加護というべきか、命拾いいたしました。正田医師が奇蹟と驚かれたのをよく覚えております。

5. 下痢で少々熱が出ましたが、健康体質なので何の事なく乗り越えました。

6. 六年前頃から血圧の下が高くなるくせがあり、時々測定に行っております。最近、眼病のくせがあり、角膜炎、コウサイ炎になり、緑内性のうたがいが有ると診断され、目下小川眼科で養生中なり。歯が弱い。

氏名	竹田律子	生年月日	大正6年11月1日生
現住所	広島市安古市町上安八六五—一 TEL8—8489	当時の職業	農業

1. 世帯主　竹田近登　二度目の召集
　妻　〃　律子　農業
　母　〃　ムラ　〃　S22年2月21日死亡
　長男　〃　康律　(S17年6月13日生)
　三男　〃　良邦　(S19年1月28日生)
　弟嫁　〃　和枝　現住所　福井建設省福井事務所

2. 裏の畑にいて、異様な光で目をまばたき、ドガンでびっくり家に飛んで帰り、家の中に何事が起きたかと、一瞬の思いでした。ガラス戸はメチャメチャにこわれ、真向こうに見える武田山より少し左よりの山の上当りにムクムクと入道雲のような、変った形のものは一生忘れられません。

その後間もなくあたり一面がうす暗くなり、外をたたきつけるような大雨が降りだしました。その間子供が百メートル位はなれた所に遊びにいっていたので、つれて帰り雨にあいました。

3. ① あたり一面がうす暗くなり黒い雨が降ったので、此の世がなくなるのではと、男はいないし、心さみしく思いました。裏の風呂場の戸及びトイレの戸は皆内がわにはまりこみ、私の家はもうりびさしの箱むねのわら家です。茶の間あたりのわら屋根がふっ飛び家の中はほこりだらけ、雨の降った後、前通りの軒下が何時もより一尺位前に雨あとがあるのが不思議でした。数日後、屋根ふき替えの時、屋根のがっしょうが爆風のため、こわれ、前に軒が全体に下がったものでした。屋根替えも母、主人の弟嫁、私と三人と屋根やさんと女ばかりで真黒くなってやりました。

② 当時、馬をかっていました。朝裏の藪にはなしがえしており、雨が降りしばらくして馬を外に出していることに気付き、家につれて帰りました。その後しばらくして、どこが悪いともわからず、足、腰たたなくなり、翌年の三、四月頃あの世へ去りました。今思うとつるべ井戸で小川の水を飲料水にも使っておりました。

4. 八月六日当日夫婦と二人の子供計四人をわりあてされ、一週間食事を共にしました。三篠の人でした。八月八日に祇園町西山本、私の里の父と弟が被爆に会い一応つれ帰ったものの、頭髪はぬけ、歯ぐきからは出血し、くるしみながら此の世を去りました。八月二九日死亡。
　私は二人の子供をつれて看護に行きました。又、後日にも父、弟の見舞いにも行きました。

5. その当時は、未だ若いせいか、これといったこともございませんでしたが、その後四〇歳〜四五歳頃夜眠れない夜が数日あり、少しの坂を上りながら人との会話が息ぐるしく、又床に入った瞬間、それはとても息ぐるしく、仲々ねつかれず、どうしたものかと、毎日不安な日々でした。ところが、役場より血圧測定、心電図とかをして戴き、その時萩原地区で五人要注意をききました。保健婦さんがわざわざもう一度病院で心電図をすすめられ、私は県病院に行き、心ぞうが悪いからと病気に対する注意を受けました。

6. 人との会話には、間で大きな息をつがないと話しすることはできません。少しの上り坂では、人との会話はいきぐるしくつらいです。薬と注射はずっと続けており、注射をやすんでいると胸がこわくなり、又医者に行くようなことです。黒い雨が降った事は事実です。厚生省の方も足を運んで来て実状をおしらべ下さい。

〔追伸〕
　黒い雨が夕方降ったと記憶しておられる方があるかもしれませんが、それは雨が降る前後の間は暗くなったので、年数もかなり立つことですし、やむをえないと思います。

氏名	石岡与一	生年月日	昭和5年9月13日生
現住所	広島市安古市町上安一五〇 TEL8(0143)	当時の職業	国鉄職員

1. 当日休み（国鉄古市橋変電区勤務）のため家に家族三人（母、姉、兄）いた。他の家族は父は野菜市場へ、長男宇品暁部隊、妹二人小学校であった。

2. 家にて休養中空襲警報で庭に飛び出し、飛行機がどの方面に飛行するか確認していると、武田山上空に光線がぴかぴかと光った。しばらくすると大爆音とともに（爆風により家の障子が倒壊し、山の向こうからきのこ雲が天高くもくもくと昇っていた。これは爆撃による弾薬庫が爆破されたのではないかと思った。

3. 爆発後二～三時間後であったが、空が一面まっ黒くなり黒い雨が降り出した。これは爆発による煙りが一面空をおおい、このためか、これは農家が日照りが続いた場合に行なうのと同じような状態であると思ったが（安川の魚が浮いて流れだしたので、これはどうなったことかと思っていた。雨は普通の夕立ぐらいと思って濡れても別に気にもせず野良仕事をした。

4. 夕方横川町から知人が家に避難して来たが、頭の先から足の先まで火傷のために話しも出来ない。ただ水をくれと手まねにてたのむだけであった。翌日も同じような状態であったので、家族が大八車にて治療のため病院につれていっていたが、一〇日目に死去された。私は七日から勤務のため職場に行ってみると区長（変電区）が当日事務連絡のため広島鉄道管理部に自転車にて行く途中、三篠橋上にて被爆されて変電区に避難されていた。七日になって自分が乗っていた自転車を捜しに行くよう命ぜられ、横川から三篠橋、白島方面と捜しまわってみたがみつからず、二日間も捜し歩いた。上司は、当時は自転車は貴重品でもあり、備品（公用車）で紛失した場合は始末書を書かねばならないために、あの焼野ケ原を捜しもとめたのである。

5. 別に異状なし。

6. 昭和三〇年頃から肝臓病にかかり、現在は高血圧病である。

氏名	新原順市	生年月日	明治29年1月5日生
現住所	広島市安古市町相田七三一一 TEL8(0267)	当時の職業	農業

1. 三世帯で暮していたと思います。家の者は六人（夫婦と長男、娘が三人）宇品町からソカイ者（四名）横川町から（六名）、計一六名で住んでいました。職業は夫婦で農業を営み、長男は鉄道員、娘三人は、学徒挺身隊が1名、他は小学生でした。

2. ちょうどその日は全員（五名）で玄関前で話しをしていたと思います。八時すぎ異様な光が目の前を明るくし、ドンと大きな音がした。ああこれは東洋機械工場がやられたのだろうと、近所の人達と武田山に登った。市内全域の大火、どうすることもなく家に帰った。当時常会長をしていたので被災者の戸別割当等いろいろと忙しかった、と思いだされる。我家にも進徳女学校の生徒三〇名余りの面倒を見ました。

3. 武田山に登って帰る途中、晴天なのに真黒い煙りが空をおおい、真黒い雨が降りだした。それもかなり多く降ったように思い出します。強い爆風のためにガラス戸や家のたてり等大分くるったようでした。三年後して女房は、胃がんで死にました。

4. 疎開者が二組いたので、被爆者は進徳高女の生徒三〇名位で、別に異常もなく、看病はしなかったと思う。外に親類の人達も五人程の被爆者があったが……よく思いだせない。

5. 親類の者や友人、近所の人達の人探しの毎日で自分の事等余り気にしなかったが、当日は皆んな気がはっていたので、妻が気分が悪くなったように思う。

6. 現在、被爆手帳を持ち通院している。又、家族の者達も病気勝ちなようです。

氏名	村田スサコ	生年月日	明治45年3月10日生
現住所	広島市安古市町上安 TEL8(1024)	当時の職業	農業

1. 主人は明くる日から広島に親戚の人さがしに毎日出て行きました。私は小学校に手伝いに出ました一日。

2. その日私はまだ子供がねている間にと買物に出かけ、お店の前で目の前に光と共にガラスが落ちて来、我を忘れて家に帰りました。障子、フスマはとび、天上が寝ていた子供の上に落ちました。その年は田に水がないので、雨が降って来たので、急いで田の草を取りに出ましたが、黒い大雨となりました。

3. その時は母七二歳と、田の草をカガンで手で取っておりました。大雨となり、セナカに痛いほどでした。黒い雨で油が一パイついてきました。母は田の中でオートがつき、ゲーゲはいたり家に帰りては、下痢がつづきました。母はそれ以後元の体にはならず、母は二二年に亡くなりました。大雨風と共に、武田山の方から、トタン一枚の様な物が吹き飛んできました。

4. 六日より被爆者を八人割りあてられました。ヤケドの人もあり、又頭の髪のヌケル人ばかりでした。ヤケドの人には毎日キュウリの汁を取っては付けたり、キリの木を見つけて、焼いて粉にしてつけたり、色々と看病はしました。

その中でも割合と元気と思った人が二人も死なれました。一五日位で残りの人は引上げましたが、その後すぐ兵隊さんが七人来られ、これも髪のヌケル人でした。これも一〇人位はおられました。狭い屋根の下で、我家の者が八人本当に苦しかった。

5. 主人は小川の水で足を洗って、ヤケドのバイキンが入って両足とも原爆のヤケドと同じようになって永いこと困りました。その上原爆病にかかって、永年床に付いて四六年亡くなりました。

6. 変形性関節症、せきつい症、白内症

内科でも病気はある。体の調子が悪い。

氏名	山本スヤエ	生年月日	大正18年8月2日生
現住所	広島市安古市町上安二八五 TEL8(1036)	当時の職業	農業手伝

1. 父 原得一 農業
母 ヨシノ 〃
義姉 美代子 農業
妹 春江 郵便局事務員
〃 政子 学童
〃 ヨシ子 〃
同居人
学童疎開 中野実
〃 桂淳
疎開人本人 山本スヤエ
〃 長女 〃 利江

2. 畠仕事をしていた一瞬にピカと光りドン大きな爆音と共に爆風吹き飛ばされる程、黒煙がむくむくと上がり恐ろしいキノコ雲、武田山の方から色々の物が飛んで来る。近くは戸板が飛ぶ、家は天井板が吹き上げ、ガラスは破れ、壁は落ち、家は傾むく。近所にいた姉は病気のため寝ていたため、ガラス窓が吹き飛んで体の上で破れ、体内に破片が立ちとみ、そのため長い間苦しみ足はびっこになる。数年立ってひざよりガラスの破片が四つ位出て来る。

3. 数時間立って大夕立のような黒い雨が降る道路をすすが流れるようであった。小川に黒い水が流れる。隣のおじさんは小川の水で足を洗われたため、焼どしたようになり汁が出て病院通いをし長い間困られた。又八月六日午後より被爆者がぞろぞろ衣服ぼろぼろ血まみれで裸体に近き状態でこられる。父常会長で一時収容炊き出し等介助に当る。

4. 父常会長をしており被爆者を百名余り一時収容。庭にむしろを敷き炊出し食事の世話介助等に当る。又各家庭を割当る等手伝をする。

中野村親家族 新市町で被爆（五名）親戚

〃 血を吐き死亡 八月三〇日（無傷であったが髪は抜け黒斑が出来た）

光子 やけど死亡 八月二七日

靖子 血を吐き死亡 九月二日（発熱三九度余りの日が続き髪は抜け坊主になる）

文江

中村都美子 進徳女学校生徒被爆府中小学校に収容されていることが三、四日立って分る。父原得一連れに行くが一人では無理で、荷車を引き義姉で一緒に連れに行く。傷口にうじ虫がわいていた四ヵ月間同居。

佐々木、小学校二、三年の女の子段原で被爆し古市小学校に収容されていた。一週間あまり介助し近い親戚に引き取られ死亡。

割当で六名、警察官家族六名を一週間あまり食事の世話介助する以上大勢の人の看護介助に当る。自宅で看護した者、常会長の指示でも公的とみなしてほしい。お世話した事には変りはない。

5. 当時〇歳利江を連れて看護したが利江は下痢、嘔吐、発熱を度々おこしていた。病弱で困った。本人はその当時元気であった。

6. 現在は原爆の症状は現われていないと思うが診察していないので分らない。血液検査で少し尿が赤くなって来る。高血圧、先が不安でたまらない。

火災雲 広島北郊古市町より見る（8 km）

1978年８月６日　印刷・発行

被爆体験記

ピカに灼かれて
黒い雨の町の証言　第２集

編集・発行　広島医療生活協同組合
生協原爆被害者の会
広島市安古市町中須６１０
TEL　(08287) ９－1111(代)
頒価　450円